



Universe 25 … 人類の未来を示す実験？

米国の首都ワシントンDC地域には多くの研究機関がひしめいている。その中の一つに国立衛生研究所（NIH）がある。NIHには1万8千人以上が働いており、そのうち6千人以上が科学者（医師、生命科学研究者）となっている巨大な医学・バイオ系の研究機関である。日本の文部科学省の「米国NIH在籍日本人研究者の現状について」（2005年）によると、日本人の科学者も400名以上が働いている。

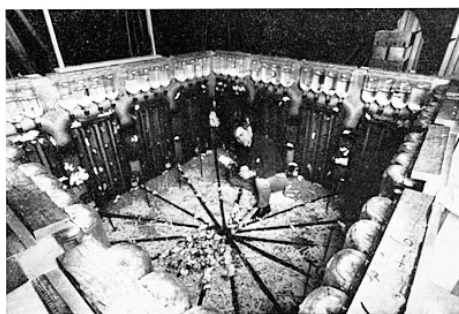
Universe 25は、NIHに所属する研究者ジョン B. カルフーンにより1960年代に行われた動物の生態実験に対し付された俗称であり、マウスを限られた空間で多世代にわたり生息させることで起きる変化を追う内容となっている。



Wikipedia「ジョン B カルフーン」より

Wikipediaの「ジョン B カルフーン」によると、実験で使われたマウスの生息空間は9フィート（2.7 m）四方の床に、高さ4.5フィート（1.4 m）の壁が設けられたものだった。マウスには十分な数の巣箱、十分な量の餌、十分な量の水が常に与えられ、生息空間は適温に常に調整されていた。当然ながら外敵は

いない。マウスには、生存に必要な餌などの心配が無用で、外敵を恐れる必要もない“楽園”が与えられたことになる。唯一の制限は、閉鎖空間のみであった。



Wikipedia「ジョン B カルフーン」より

その“楽園”に最初に放たれたのは、オス、メス4組の計8匹のマウスだった。実験開始から104日目に、最初の子供が生まれた。それから55日ごとに倍になるペースで、文字どおり“ネズミ算式”に個体数が増加していった。315日目に620匹に達した後、増加率が鈍化しはじめ、やがて最後の生存新生児の出産が600日目にやってきた。総個体数が最大値の2,200匹に達した後、徐々に個体数の減少速度は増し、920日目に最後に残った1匹が死んで、この“楽園”に生息するマウスは絶滅した。

Universe 25が実施された1960年代の人類には「少子高齢化」問題は存在しなかった。当時の問題はそれとは真逆の「人口爆発」だった。1973年に公開された映画「ソイレント・グリーン」は、私にとって記憶から消せない映画だ。そこでは、人口爆発による食糧難の対処法がテーマとなっていた。



映画.COMより

しかし、それから半世紀後の今、人類の課題は人口爆発ではなく、むしろ人口減少であると認識されるようになってきた。

Universe 25を私が知ったのは昨年のことだ。それまで、人口が減少に転じたとしても、十分に減った後には、再び増加していくのが自然の理であろうと考えていた。そんな私は、Universe 25によって頭を殴られたような気になった。人口が減少に転じた後、そのまま減り続けるのが“楽園”における自然の理のようなのだ。

Wikipediaの「ジョン B カルフーン」によると、マウスの“楽園”における個体数減少フェーズでは、親離れ前の子の追い出し、子の負傷の増加、同性愛行動の増加、支配的なオスによる縄張りとのメスの防衛機能の不全、メスの攻撃的な行動、防衛されることのない個体間攻撃の増加、非支配的な雄の無抵抗化、などの“異常”行動がみられたそうだ。

メスは繁殖をやめ、同時期のオスは引きこもり、求愛動作、戦闘を行うことはなく、健康のために必要なタスクだけをおこなった。食べる、飲む、寝る、毛づくろいをするなどである。このような個体は艶々とした健康的な毛並みが特徴的で、「ザ・ビューティフル・ワン」と呼ばれた。個体数が急激に減って

いっても、繁殖行動が再開されることはなく、“異常”行動が維持された。

人類はどうだろう？我々は、生きるのが少しでも楽になるよう様々な物を発明してきた。すなわち、“楽園”の実現を目指してきたのだ。人類は、「十分な数の巣箱、十分な量の餌、十分な量の水が常に与えられ、生息空間は適温に常に調整され」、外敵を恐るる必要がない“楽園”の実現にむけて努力してきた。

しかし、“楽園”の行きつく先が絶滅のなら、その方向で進み続けるのはまずいのではないだろうか？あるいは、“楽園”での幸福な生活が維持できるのなら、その結末が絶滅でも構わない、と考えることもできるかもしれない。Universe 25において、920日目に死んでいった最後の1匹は幸福だったのか不幸だったのか？幸福を感じながら死んでいったように思えなくもない。人は幸福を求めて生きる生き物なのだとしたら、“Universe 25の最後の1匹”も含めそれでよい気もする。

果たしてUniverse 25は、地球という“閉鎖空間”で“楽園”を目指す人類の未来を示唆する実験だったと言えるのか否か？

著者紹介



宮川 良夫(みやがわ よしお)

United GIPs代表、弁理士・米国パテントエージェント

1956年 京都生まれ。1978年 同志社大学工学部卒業。1986年 弁理士登録。

1997年 米国パテントエージェント登録。弁理士法人新樹グローバル・アイ

ピーを初めとして、世界8カ国（地域）にて10カ所の弁理士事務所設立、経営に携わる。1995年以来ワシントンDCに滞在し、現職場はUnited IP Counselors, LLC。趣味は、Rock Creek Parkを有効活用した犬の散歩と子（孫？）育て。好きな言葉は「天地不仁」。

【参考】www.unitedgips.com

